

有明高専に優秀賞

農業担い手づくりを支援

大牟田市東萩尾町の有明工業高等専門学校(高橋薫校長)は第17回大学発ベンチャー・ビジネスプランコンテストに出場。農業の担い手づくりを支援するAIシステムなどを開発し、6年ぶりの優秀賞を受けた。



賞状を手にする湯さん(中央)

同コンテストは大学生、高専生らの起業・創業意識の醸成を目的に、九州ニュービジネス協議会など7団体で構成される実行委員会が主催。1次審査には53件の応募があり、そのうち21件が書類選考で2次審査に進出。プレゼンテーションによる審査を経て8件が最終審査会へ参加した。

ビジネスプランコンテストで

同高専は2009年から3年連続で優秀賞以上を受賞していたが、今回は6年ぶりの受賞。本科2年生から専攻科2年生までにOBを含む8人の混成チームで、代表者は起業を目指している電子情報工学科4年、角佑都さん(19)＝筑後市前津＝。実家が専業農家であることから、農業に特化したサポートやシステム開発を思い立ち、九州から始める農業革命「担い手づくり」を支援する「人に優しい超精密農業」というタイトルで発表した。近年、超精密農業やスマート農業など、農業の効率化が注目されているが、日本の農業人口は減少・高齢化が進行しており、特に若い世代における新規就農者獲得は大きな課題。その原因の一つに、農作業の「暗黙知」

が挙げられる。大半の農家は長年の経験や勘を頼りに農作業を行っており、それらのノウハウを持っていない新規就農者には大きなハンディキャップがある。また農業のIoT化が進んでいる一方、それらを使う農家側にはIoTに関する知識・技術が不足しており、大きな隔たりがあるのが現状。そこで既存の農家や新たに農業を始めた人々を対象に、IoTを身近に感じてもらうための「実践的IoT教材」と、農作業における暗黙知を形式知化するための「農業支援AIシステム」を開発・販売するビジネスプランを作成。従来のスマート農業は農作業の効率化ばかりに着目していたが、人材育成とノウハウ継承に特化することで新規性・独創性の高さを

アピールした。 「何の知識もなく、アイデアを出す手法、事業の将来性などを考えるのが大変でしたが、さまざまなことを教えていただき、今後の社会生活にも生かせる経験ができました。優秀賞という名誉ある賞を頂けて、うれしいと角さん。「コンテストの決勝で指摘を受けた課題をクリアし、本当にビジネスとして成り立つようにしていきたい」と話していた。

その他のチームメンバーは大塩悠貴さん(OB、佐賀大学大学院修士課程2年)、鴻上國南さん(専攻科1年)、谷口幹さん(同2年)、藤丸大也さん(本科2年)、松本祐弥さん(専攻科1年)、森下伊織さん(同1年)、山崎幸村さん(本科2年)、吉富康英さん(専攻科2年)。指導を担当した同高専寄附講座特命助教の野口卓朗さんも、在学中の10年に優秀賞を受賞している。(河野 美緒)

人材育成とノウハウ継承に特化した新規性アピール